

## 「故郷では敬われない」

2022年01月13日

この人は、大工ではないか。マリアの息子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。姉妹たちは、ここで私たちと一緒に住んでいるではないか。」こうして、人々はイエスにつまずいた。イエスは彼らに言われた。「預言者が敬われないのは、自分の故郷、親族、家族の間だけである。」(マルコ福音書6章3節～4節)

主イエスは故郷のナザレにお帰りになり、弟子たちも従った。30歳の頃、故郷を出てから、初めての帰郷である。安息日になり、礼拝を捧げるために会堂に行かれた。礼拝では、出席者が神の言葉について自由に話すことができる形式であったので、主イエスは話された。どのような話をされたかは記していない。ところが、聞いた人々は、「この人は、このようなことをどこから得たのであろうか。この人の授かった知恵と、その手で行われるこのような奇跡は一体何か」と驚いた。カファルナウムの会堂で話された時、人々は「律法学者のようでなく、権威ある者のようにお教えになった」と聞いた。主イエスの話は、律法について紋切り型に解釈する律法学者と違い、権威ある、即ち、神の恵みのリアリティをご自分の主体をかけた力強い言葉で語る説教であった。ナザレの故郷の人々に深い感動を与えたのである。

ところが反面、「この人は、大工ではないか。マリアの息子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。姉妹たちは、ここで私たちと一緒に住んでいるではないか」と言う人々がいた。ナザレの人々は、イエスの出自、生い立ち、仕事、そして、家族構成も知っている。大工の仕事をしていた。マリアの息子である。「マリアの息子」という表現から、父ヨセフは亡くなっていたと想像される。そして、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの4人の弟たちがいる。姉妹たちも、ナザレで一緒に住んでいる。姉妹たちの名は、女性を軽視する文化から記しされていないが、複数いた。イエスは子沢山の寡婦の家族の長男

である。どこで得た知識であろうかと驚くほど、感動的な説教を語るが、イエスの素性は知られている。故郷の人々は、イエスの過去を見て、霊で語る神の言葉を受け入れることができなかつた。主イエスは彼らに、「預言者が敬われないのは、自分の故郷、親族、家族の間だけである」と言われた。ナザレの人々は、イエスの子どもの頃から村を出て行った時のことまでの全てを知っている。肉を見て、つまずいたのである。父親が伝道、牧会し、子どもの頃、育った教会に赴任する牧師がいる。彼らにはひたすら敬服する。私は洗礼を受けた母教会に帰ると、求道中の自分の言行を恥ずかしく、小さくなっている。

パウロはⅡコリント5章16節で、「それで、私たちは、今後誰をも肉に従って知ろうとはしません。かつては肉に従ってキリストを知っていたとしても、今はもうそのように知ろうとはしません」と書いている。ペトロなどの使徒たちは肉のイエスから直接教えを受けたが、パウロは肉のイエスを知らない。パウロは使徒たちに比べると、劣る伝道者と批判されたことに対して、肉に従うのではなく、霊におけるキリスト認識が大切であると語ったのであろう。しかし、この言葉には真理がある。肉の目で見るとは、事柄の本質を見抜く霊の視点こそが、信仰の目である。

主イエスは故郷では手を置いて病人を癒やしたほかは、不信仰に遮られ、奇跡を行うことができなかつた。ナザレを離れ、近くの村を巡って教えられた。信頼できる医者にかかると、回復が早いと言われる。主イエスに対する信頼が、癒しの恵みに与ると伝えている。